博物館学雑誌 第21巻 1号（通巻24号）24〜29ページ 1996年3月

【シンポジウム】

「尼崎市歴史博物館準備室」

Preparation Office for Amagasaki City Historical Museum

桃 谷 和 則*
Kazunori MOMOTANI

ご紹介いただきました尼崎市教育委員会歴史博物館準備室で学芸員をしております桃谷と申します。私の報告は、準備室の段階でありますので自らの館が被災したという話ではなく、第1点目として震災以後、私ども歴史博物館準備室の学芸員がどのような行動を行ったのかを、資料救出活動を中心にご報告し、第2点目に震災により尼崎の歴史博物館建設事業がどのような影響を受けたのかについてご報告をさせていただきたいと存じます。

お手元に「震災と歴史博物館準備室」と題したレジュメをお配りいただいていると思いますので、その順序に従って話を進めさせていただきます。まず、本題に入る前に今回の地震による尼崎市の被害状況について簡単にご紹介させていただきます。

森田先生からもご紹介いただきましたとおり、尼崎市は兵庫県の一番東の端に位置し、すぐ東隣は大阪市です。今回の地震では、諸岡先生のお話しにありました震度7の地帯からははずれておりまして、神戸市や芦屋市、西隣の西宮市に比べますと被害は比較的軽微であったといえます。しかし、警察発表で27人の尊い命が奪われましたし、家屋の全半壊も35,000世帯に及んでおります。市内の文化財につきましても建造物を中心に相当な被害が出ております。

それでは、引き続き震災後の歴史博物館準備室の活動に話を移します。

現在、私どもの準備室には男性4人、女性1人、計5人の学芸員が勤務いたしております。ここでは、この5人の学芸員が地震以後、どのような活動を行ったのかをお話させていただきます。

1月17日の地震の当日、職場に出勤することができましたのは1人だけでした。他の4人のうち2人は交通機関が不通となったため出勤することができず、私を含みます残りの2人は、先程の諸岡先生の地図にありました震度7地帯の真っ只中である神戸市東灘区及び灘区に居住いたしており、とても出勤どころの状態ではありませんでした。私は翌18日に自宅から徒歩で約5時間かけて職場に出勤いたしました。国道2号線沿いに歩いたのですが、森田先生のお話しにありました武庫川という川を越えて尼崎市内に入ると「あれっ」という思いをいたしました。スーパーマーケットやコンビニエンスストアが営業しているのです。確かに壊れている家もありましたが、神戸と尼崎とではこんなに被害が違うのかということを身を持って感じました。私はこの日から約2週間、同僚宅から通勤することになりましたが、この日には何とか4人が出勤可能となり、全員が出勤できるようになりましたのは1月30日になってからのことでした。

私たちはまず、歴史博物館準備室が収蔵している博物館資料及びその収蔵施設の被害状況について確認を行いました。最初に申し上げましたとおり私どもは自らの館を持っておりません。しかし、歴史博物館準備室には既に18,000点をこえる博物館資料が収蔵されており、これらは大阪市内の民間倉庫1ヵ所と尼崎市内の4ヵ所に分散し蛸足状態で収蔵しておりました。出勤してきた学芸員は手分けをしてこれらの収蔵資料及び施設を確認いたしましたが、ス

＊ももたに　かずのり
尼崎市歴史博物館準備室・学芸員

チール棚が歪んだり、一部の資料が転落し破損した程度の被害はあったものの、施設自体は無事でした。特に、美術資料や歴史資料については大阪市内の倉庫に預けていたため、幸いにも被害は全くありませんでした。このように収蔵資料も施設も軽微な被害で済んだのですが、その後、実はひとつ問題が起こりました。これまで歴史博物館準備室が収蔵施設として使用していた市有の建物を別の用途に使用することになったので資料を移動させなければならなくなったのです。私どもは移動により資料が傷んでしまうことを危惧し、移動には反対したのですが、結局、3月末に民俗資料を中心とした約3,000点の資料を別の市有施設に移動させることになりました。

次に、私ども歴史博物館準備室の学芸員も尼崎市役所の職員であり、尼崎市災害対策本部の一員でありますので、災害対策関係の業務に従事することになりました。そのことについても若干ご紹介させていただきます。地震発生直後、尼崎市内には約90ヵ所の避難所に約8,600人の市民が避難するという状況になりました。私たちは尼崎市の防災計画では災害対策本部避難部に属しておりますので、避難所への宿直勤務を中心に災害関係の業務に従事することになりました。ちなみに、私ども5人の学芸員が1月17日から5月16日までの4ヵ月間にどういう災害関係の業務に従事したのかを数字でご紹介させていただきます。これは全て5人の勤務状況を合計した数字ですが、避難所での宿直勤務等が47回、家屋の被害状況調査、これは新聞やテレビの報道でご存じと思いますが義援金や罹災証明の関係で家屋が全壊か半壊か、あるいは一部損壊かの判定を市役所が行ったのですが、これへの動員が13回、その他に避難者への聞き取り調査の実施や避難所からの備品の搬送、災害対策本部での電話受付など、いろいろな業務に従事をいたしました。この間、休日出勤が25回、超過勤務時間数は延べ669時間という数字が残っております。これでも、神戸市職員の方などに比べますと全然、けた違いに少ないと思います。

このようにかつて経験したことのない災害関係の業務をこなしながら、私たちは一方で尼崎市内で被災した歴史資料や民俗資料の救出に乗り出すことになりました。次のこの資料救出活動に話を移していきます。

壊れた家屋や土蔵・納屋の中にある資料を調査してほしい、あるいはこの際、市に寄付したいといった市民からの申し出は地震発生直後から直接あるいは間接に歴史博物館準備室に寄せられ、5月末現在で34件の被災資料に関する情報や救出依頼が私どもに寄せられました。私は当初、歴史資料等を救出しなければという気持ちをあまり持つことはできませんでした。それは、自分自身が被災し、この混乱のなか一体自分は何をすればよいのかということが実際のところよくわかっていなかったからだと思います。しかし、市民からの救出依頼が増え、実際にそれらの方のところに足を運んだり話をしていくなかで、残された歴史資料等を救ってほしいという市民の要望に応える必要性を痛感するようになりました。そして、単に市民からの連絡を待つという受け身の姿勢ではなく、こちらから積極的に資料救出を行うこととし、3月と4月には2度にわたり尼崎市の広報誌である『市報あまがさき』で次のような資料救出の呼びかけを市民に対して行いました。

「歴史資料の調査と保管をお手伝い

今回の地震で被害を受けた家屋や納屋などに、古文書や屏風、民具などの歴史的資料があればご連絡を。学芸員が調査したり、保管の相談に応じます。詳しくは電話で歴史博物館準備室☎489—6732へ。」

また、以前より資料調査等で関係のありました方には、直接訪問させていただき調査と保存について協力を依頼しました。その活動の記録について簡単にご説明させていただきます。依頼の内容は主に寄贈で、これまでに2,300点をこえる歴史、民俗、美術に関する資料の寄贈を受けました。次に寄託ですが、これまでに3件の依頼がありました。この内2件は本堂や庫裡が全壊してしまった寺院からの依頼で、1件については私どもの方で庫裡内部の絵画や古文書をお預かりいたしました。もう1件の寺院からは毘沙門天像を救出いたしましたが、これは残念ながら相当虫食いが進んでおりまして、燻蒸設備を持った施設で預かる方がよいと判断し、検討・相談いたしました結果、姫路市にある兵庫県立歴史博物館でお預かりいただくよう手配をいたしました。その時の写真をレジュメに紹介させていただいております（写真1）。

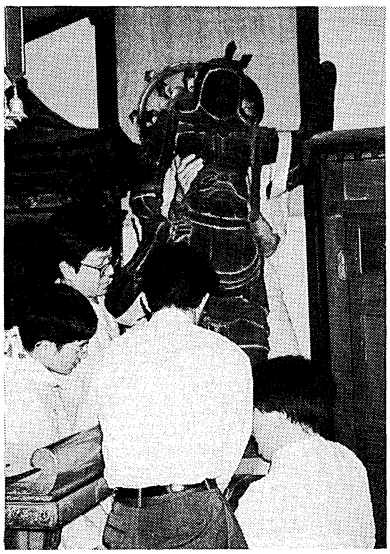

写真１　毘沙門天像の搬出作業

私どもが５月末日までに実際に被災資料所有者の方のところに出動いたしました回数は49回に及んでいますが、家屋解体の日程等の都合で未だに出動できていない件数が８件あることを合わせてご報告いたします。まだ、資料救出活動は終わっていないのです。(1)

さて、私自身、今回の活動を通じて数多くの市民の方、被災者の方のところに足を運びお話を聞かせていただきましたが、ある市民の方から次のような話を聞かされ強いショックを受けたことがありましたので、皆さんに問題提起も含めまして、お話しさせていただきたいと思います。それは、市内のある旧家のご当主が私どもの職場にお越しになって地震のことなどをお話しいただいた時のことでした。その方は、地域の歴史の語り部としてご活躍をされており私も以前より長くおつきあいをさせていただいている方なのですが、その方が次のような話をされました。地震の数日後、ある資料保存機関の職員がその方のお宅に来て『先生、納屋は大丈夫でしたか、納屋の資料を見せて下さい』といきなり言ってきたそうです。まだ地震からそんなに経っておらず多くの人命が奪われているという状況のなかで、いきなり『納屋は大丈夫でしたか』と言ってきたことにその方は腹を立てられ『あなたは僕の命よりも納屋のなかの資料のほうが大事なのか』と言ってその職員を追い返したということでした。どうもその職員は同じようにして民家を訪ね歩いていたようで、同様の話を他の方からも聞いております。この話をお聞きになって、ここにお集まりの方の中には仕事熱心な職員だと思われる方がおられるかもしれません。しかし、私は、自らが被災者のひとりであるからかもしれませんが、資料の所有者が被災者であるということを無視したような行動には大きな疑問を持たざるを得ませんでした。少し余談になりましたが、皆さんにお考えいただきたいと思いご紹介させていただきました。

なお、ここで少しだけ民間の資料救出活動について触れておきたいと思います。今回の震災に際して数多くの団体が文化財や歴史資料の救出活動を行っています。阪神淡路大震災被災文化財等救援委員会、いわゆる文化財レスキュー隊と呼ばれるものと、歴史資料保全情報ネットワークに関する新聞記事をレジュメに掲載いたしました。両者ともに尼崎市内に現地事務所が置かれています。この他にも地元NGO救援連絡会議文化部会や神道青年全国協議会震災対策本部などが文化財等の救援に乗り出しております。これらの活動は大きな成果を上げているようで、新聞の地方版などにはこれらの活動成果がたびたび紹介されております。私ども歴史博物館準備室の学芸員はこれらの団体とは直接の関係をもっておりませんので詳しく報告することはできません。しかし、本日は博物館関係者の方々の集会にお招きをいただきましたので、報告の本旨とは若干離れてしまうのですが、１点だけ問題提起させていただきたいことがあります。それは、これもレジュメにご紹介させていただいております阪神大震災対策歴史学会連絡会が出しました「被災歴史資料の保存救済についての学会アピール」についてです。私が問題にしたいのは傍線を引いた部分です。まず最初の傍線のところには「先人の労苦の証である歴史資料は、各地の資料館や文書館に蓄えられています」とあり、次の傍線では「史料ネットでは、各地の文書館や資料館の復旧作業、行政資料の保全、在地史料の把握などを関係者にお願いするとともに、そうした活動を積極的にお手伝い致します」と述べられています。一読して明らかなように博物館、あるはい歴史博物館という言葉は全く出てきておりません。つまり、

歴史学会は未だに歴史博物館を歴史資料の保存施設とは見ていない、ということをこのアピールから読みとることができるのではないでしょうか。本日、歴史博物館の方がどれだけ来られているのかは存じませんが、歴史学会の博物館に対するこのような認識の問題点を指摘させていただき、改めて歴史学会及び歴史博物館関係者の方に「歴史博物館は歴史資料の保存施設ではないのか？」というレジュメにも書きました問題を提起させていただきたいと思います。(2)

以上で、被災資料に関する報告を終わりまして、最後に今回の震災が私どもの歴史博物館建設事業にどのような影響をあたえたのかをご紹介させていただきたいと思います。

今回の震災により、尼崎の歴史博物館建設事業は短期的、あるいは長期的に多大の影響を受けました。まず、短期的な影響としましては2月、3月に予定をしておりました資料購入を行うための資料評価委員会の開催や収蔵資料展の開催が全て中止または順延となってしまいました。資料の購入に関しましては、資料所有者の方に事情をお話しした上で購入時期の延期をご了承いただき、7月頃には評価委員会も開催できるよう準備を進めております。また、収蔵資料展につきましても7月に開催することが既に決定いたしております。このように、短期的な影響については事態が落ち着くにつれて解決されつつあるのですが、私たちにとって長くて重い影響が出てしまいました。それは、歴史博物館建設用地に被災者用の仮設住宅が建設されたということです。

尼崎市内には2,218戸の被災者用仮設住宅が建設されましたが、そのうちの40戸が歴史博物館建設用地に振り分けされました。この用地は尼崎市の主要なターミナルである阪神電鉄尼崎駅から歩いて5分もかからない交通至便の場所にあり、ここに約4千平方メートルの土地が更地の状態で存在しておりましたので震災直後から施設住宅が建設されるのではという危惧の念を持っておりました。当初の市の計画では公園などの公共用地だけで対応できるということのようでしたが、仮設住宅の建設戸数が増加するにつれ用地確保が難しくなり、結局、歴史博物館の建設という課題と被災した市民の生活の場を確保しなければならないという課題を天秤にかけた結果、後者が行政としては優先されるという結果になったのです。この判断を私が否定することはできません。市民の生命や生活を守るというのは、尼崎市が行政として果たすべき当然の役割だからです。しかし、歴史博物館準備室が発足して既に7年、歴史博物館の開館に向けてひたすら邁進してきた私ども学芸員にとってはやはり複雑な思いがあるというのが事実です。

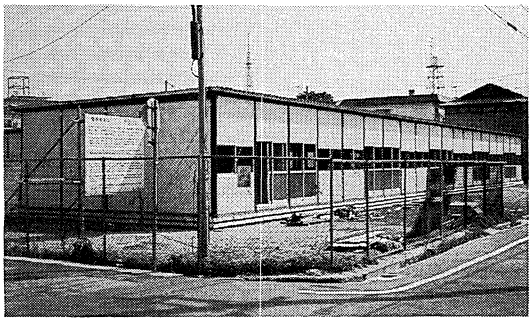

写真2　歴史博物館建設用地に建てられた仮設住宅

最後になりましたが、私は3月末のある日、カメラを片手に歴史博物館建設用地に向かいました。目的は建設中の仮設住宅を写真に収めることでした。その時の写真を1枚、レジュメに掲載させていただきましたが、私はこの時撮影した写真を将来、これはいつのことになるのか現状では全くわからないのですが、歴史博物館が開館した際には必ず常設展示室の一番最後の部分に展示したいと考えております。今回の震災という歴史的事実を尼崎の歴史博物館で語るのには最も適した展示資料のひとつではないかと考えているからです（写真2）。

これからの見通しが全く立たないという大変困難な状況に陥ってしまいましたが、今後とも尼崎の歴史博物館ができるだけ早く開館できるよう努力していきたいと考えておりますので、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。それでは私の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

(1)　資料救出活動は現在も継続中であり、1996年3月31日現在、被災資料に関する情報は、こちらから調査を依頼した件数を含め49件で、学芸員の出動回数は75回となっている。その結果、寄贈を受けた資料は約2,700点に増加している。

なお、歴史博物館準備室が行っている資料救出活動を紹介し、救出した資料の社会的還元を図ることを目的に、1995年11月21日から12月3日まで、尼崎市立中央図書館を会場に「被災資料が語る歴史」と題する展示会を開催した（図1）。救出した甲冑や古文書、舟大工道具等の展示資料が約70点、救出活動の様子や市内文化財の被災状況を撮影した写真が20枚という小規模な展示会であったが、日刊紙4紙が記事掲載するなどの影響を呼び、多くの市民の観覧を得ることができた。被災資料救出活動への関心の高さを改めて確認した次第である。（新聞記事③）

(2) これらの活動については、藤田明良「阪神淡路大震災と歴史資料救出活動」（『日本史研究』No.392～395、1995.4～7）、辻川敦「阪神・淡路大震災による歴史資料の被災と救済活動」（『歴史学研究』No.675、1995.9）、阪神大震災対策歴史学会連絡会・歴史情報保全情報ネットワーク編集・刊行『阪神・淡路大震災歴史と文化をいかす街づくりシンポジウム記録集』（1995.5）、尼崎市立地域研究史料館編集・発行『地域史研究』No.73（1995.9）等を参照されたい。

被災資料が語る歴史展

来月3日まで 尼崎市立中央図書館

震災後に救出

甲冑など70点

阪神大震災後に救出された尼崎市内の歴史資料を展示する「被災資料が語る歴史」展が二十一日から、尼崎市北城内の市立中央図書館で始まった。十二月三日まで。入場無料。

尼崎市歴史博物館準備室の学芸員は震災後、六十四の学芸員は震災後、六十四回にわたり、市内の旧家や寺社などに出向き、被災資料の救出活動を実施。これまでに歴史・民俗・美術工芸資料二千六百八十三点の寄贈を受けた。

今回は、このうち約七十点を展示。常光寺（浜田町）の本尊の厨子（東京都）から救出された江戸時代初期の甲冑や、代々、船大工をしていた旧家（東本町）にあった特殊なのこぎりやかんななど、地域の歴史を伝える資料が並んでいる。

同準備室では、現在も被災資料の救出活動を続けており、市民に連絡を呼びかけている。問い合わせは同準備室（06・489・6732）へ。

震災後に救出された甲冑を見つめる女性たち＝尼崎市立中央図書館で

生き残った時代の証人

尼崎で「被災資料が語る歴史」展

がれき下から2700点救出

鎧甲や近代の箱膳も

阪神大震災から救出された歴史資料を集めた「被災資料が語る歴史」展（尼崎市教委主催）が二十一日、尼崎市北城内、市立中央図書館で始まった。

市教委の歴史博物館準備室は市民の依頼を受け、被災した家屋や土蔵などから美術工芸品や古文書などが計約二千七百点を救出。大半が寄贈され、その中から約七十点を展示した。

江戸時代初期のものと推定される黒い漆塗りの鎧甲（よろいかぶと）や、明治から大正時代に使われた個人用の食器入れの箱膳（はこぜん）など、当時の暮らしぶりを伝える品が展示されている。十二月三日まで。十二月二十三、二十七、三十日は休館。

昔の人の暮らしを伝える「被災資料が語る歴史」展＝尼崎市北城内、市立中央図書館

注目集める被災文化財

倒壊家屋から史料 救出

尼崎中央図書館 古文書など70点展示

阪神大震災で倒壊した家屋などから救出された歴史資料を紹介する被災資料が語る歴史展が二十一日、尼崎市立中央図書館で始まり、郷土愛好家らの人気を集めている。

市内の寺院から運び出された、江戸時代初期の甲冑や、民家の蔵から救出した、明治・大正期の食器セット、神社仏閣で見つかった古文書など約七十点を展示。郷土の各時代の生活を伝えている。

同市は、被災直後から市教委や学芸員が歴史資料を救済。これまでに、市民から二千百八十三点の寄贈を受けている。収集した史料は、建設予定の市立歴史博物館に収容される。

十二月三日までで、休館日は、二十三、二十七、三十の三日。入場無料。

〝救出〟の歴史資料など70点

尼崎で展示会

尼崎市教育委員会の歴史博物館準備室が、倒壊した寺社などから〝救出〟した被災資料の展示会が二十一日、同市南城内の市立中央図書館で始まった。十二月三日まで。

同準備室が震災後、市内の寺社や旧家から救出した歴史資料などは約二千六百八十点にのぼり、今回はこのうち約七十点を展示している。同市浜田町の浄尊寺で所蔵している江戸時代初期の甲冑（かっちゅう）や、崩れた旧家の土蔵から掘り出された明治時代の農具、食器類などが並べられている。

図1 「被災資料が語る歴史」展を紹介する新聞